



扶桑皇統記圖會  
後編  
五

へ選13  
2472  
12



門入通  
2472  
12

扶桑皇統記圖會後編卷之五目錄

陽成院御即位

菅家系譜角力盪觴條

野見宿祢當麻蹶速と力競への圖

春彦是善俱感奇夢 於良香宅菅公試射條

陽成院意釣殿君御製 狂病乱行閉居條

異形のものと並て釣殿の后と厭鬼ふ圖

光孝天皇御即位 行平詠述懷歌被為謫條

皇統記圖會後編卷之五

目

行平須磨の浦まろをゆきま松風村雨まろをゆきま不戯あそびふるま圖

清和上皇御登霞

禁庭種きんていしゅと怪異あやふしの條

都良香得鬼神奇句

菅公一時作えんさういつじ十詩條

羅生門らせいもん不於あて鬼神きしん都良香とらうかうが詩うたと嗣ついでぐ圖

醍醐天皇御即位

時平乱行ときへいらんこう奪叔父妻うばうぢのつま條

目錄終

扶桑皇統記圖會後編卷之五

浪華 好華堂野亭参考

陽成院御即位

菅家系譜えんげけいふ角觥かくかう濫觴らんさう條

貞觀十二年しんくわんじふにねん小大納言せうだいなごん藤原氏宗ふじわらじしゆ參議さんぎ大江音人おほえのねんど刑部卿けいぶけい菅原是善えんさう三入

貞觀格しんくわんかくを撰せんで奉ほうりりりり列位れつゐ當時たうじの博識はくしきなりり日十三年にっしゅうねん八月はつげつ源融げんじゆを左

大臣だいじん藤原基經ふじわらきけいを右大臣みぎだいじんとせせれれるる此こゝ其その基經きけいとと八前條はつぜんじょうおお述のたまふふ藤原

良相りやうしやうの婚こんひひてて双ふたたたれれ智ち能のうの人ひとなりり則すなはちち藤原時平ふじわらときへいの父ちち小こ薨かう去しよの後のち昭宣

公こうと益えきせせれれ名な臣しんなりり又また源融げんじゆとと中なかつ八はつ嵯峨さあが天皇てんかうの皇子みこ小こて人臣ひとしん小こ下したりのりり

嵯峨源氏さあがげんじの鼻祖はなもと小こて此こゝ大臣だいじん陸奥りくお松島まつしまの千賀ちがの浦うらの風景ふうけいと愛あいして六条院ろくじやういん小

千賀ちがの浦うらの地景ぢけいと摸もしし大おほいいの池いけをを湛たんたてて拱州かうしゆ難波なんぱの浦うらより毎日まいにち夕ゆふの潮うしほと都

運うせせ六条院ろくじやういんの池いけ小こ溜たまり汝に燒や延のび虫むし小こ汝に汲くみせて樂たのししめめるる因よて六条院ろくじやういんと川

原院ともいひ大臣と川原左大臣と稱せり源氏物語小何々の院と書し由此川  
 原院の更なり。同十八年十月清和天皇室祚を春宮貞明親王小鏡りし御  
 身ハ仙洞へ入せり。後小水尾山入て佛道御修行ありし由水尾帝とせられり  
 御在位十八年なり。貞明親王御年八才小て帝位小即ち此君を五十七代乃帝  
 陽成院とす奉る。即ち清和天皇の皇子小て御母ハ皇太后藤原高子とす故  
 中納言長良卿の女小て右大臣基経の妹なり。世小二条后とす。是なり。陽成帝ハ  
 貞觀十年小降誕在。同十年春宮小立まり。儲室祚を嗣めり。頃々大極  
 殿燒失せ。後たれをいま修理成就せざる。豊樂殿小於て太常會の大禮  
 を執行せり。曆号と元慶元年と改元あり。二年出羽國小夷賊蜂  
 起し。征東使を下され。三年夷賊誅小伏し。逆乱平定。多征東使都  
 凱陣を。同四年太上天皇清和天皇の御孫丹波國水尾山へ入。五年在原業平率率

此人多阿保親王の二男中納言行平の舎弟小て。美男の姿え高く歌道の達人多  
 通齡五十七才なり。同十月右大臣基経を攝政小任せり。同七年正月渤海國  
 乃使者斐邇とて人來朝し。鴻臚館へ入。此頃菅原道真卿  
 文章博士とせり。唐使と應對する程の才能の入無を以て道真卿と佐  
 小治部太輔とせり。斐邇の接伴使とたり。治部ハ異國の更を幸る  
 官あり。更なり。され。道真卿接伴使とたり。斐邇と詩の贈答あり。ど  
 りひ多。小斐邇其俊才高作を入て。唐の白樂天の風韻有とぞ感ん多  
 斐邇と道真卿との贈答の詩數多。中。小殊小其才え高。る。ハ

贈醉中脱衣斐大使

道真

吳花越鳥織初成

本自同衣豈淺情

座客皆為

君後進

任將領袖屬斐生

其その他余は是を略す。斐の題ハ道真卿と心恨なく睦び交り多く。一時道真公小向ひ  
 子熟公の相貌を入る小大貴相あり必す三公の位昇りを入る也。然も久く  
 高官小居わらず遂小御身小禍乃多岐あらんを官位昇進しも早く  
 官位を辞して其禍を避けんとすれど道真卿承引ありて其厚情を謝して  
 後年果して斐題の先見違ひを斯て斐題と内裏を言ふと御卿食應ず  
 ありて後御暇を給りて歸國して抑菅原道真卿と小文章博士刑部卿  
 菅原是善の御息男小て其先祖小神代天穗日命御子天夷鳥命より出り  
 天夷鳥命 一名武日 照入命と云 出雲國小天降りて天より齋して所の神宮を杵築の神宮  
 小納りて杵築神宮八合の其上二世の孫を鷗濡淳命とせり是を出雲乃國造  
 と定らる鷗濡淳命の弟を其美乾飯根命とせり其子を野見宿祢とて  
 天性智才秀なり親小事て孝心深く然も力量衆小勝り曾て幼年乃順父

小後成長小隨ひ母小事て至孝なり日郷小勝向大息と呼ぶ壯士あり是も野見  
 宿祢小弟乃力士小て生得義を好む宿祢と莫逆の友小て日胞のく睦び交りり  
 其頃八皇十代推仁天皇の御宇小て纏向珠城宮小皇居なり又小禁門乃衛護  
 の固とて天下の力者と梓り御門を固めり其中小大和國の任人小當麻蹶速  
 といふ大力の者ありて誰あらず蹶速が力量小及ぶ者なり是小依て禁廷を召し御  
 門の固となりて多くの食田を賜りり小蹶速ハ己ガ力の勝る成慢也。天下小  
 我小敵する者なりと繕り朝廷の高位の令も小兒のく欺れ慢り頗る無礼の行余  
 多んども公卿由渠ガ力量小怖れて誰咎る人もなく其終中をかれれど蹶速ハ愈  
 我慢小慕り朝廷小人を如く動止り其義後小昏聞小達一帝由蹶速と憎  
 疎んども渠と故なく追退ける乱を起す人吏を慮らせのひて昏慮を煩す  
 小臣下と召集られて勅詔しり中諸國の中に力量強死者と召す蹶速と力

競をさせ其者小蹶速負あふれを名として渠と追退けよとて諸臣下奉り  
 諸國觸りし者力者として召募られし等も皆蹶速が怪力に聞怖して我召  
 小應せんとし者あはれ小彼野見宿祢朝廷の御觸渡を承りて思はくとも當  
 麻蹶速何者ぞれぞまの朝廷の君臣と煩くも我君の為彼蹶速と力競  
 一渠奴を投殺して帝の宸襟を安んぶより度おれど如何せん今我母患病有  
 て病臥を是を見捨て召小應せん不孝なりと思煩ひ多小父心ち朋友の小  
 勝向太息末りて宿祢小向い今度都より諸國の力者と召れ當麻蹶速小勝更  
 を得む召抱て食禄を賜らんとの御觸なり。我斯片鄙の國小住徒小舟木  
 と俱小朽果んより召小應とて都上り。彼蹶速と力競せむとや六如何とい  
 ろれ宿祢末て我疾より其心おれ我母病小深りて意小任せむと足下小  
 兩親もあは身おれ疾召小應。蹶速と力競の運よく渠小勝あむ身の青

雲といひ弟王帝の宸襟を安んぶなる忠勤なり。急を思ひ入れよと勸れ太  
 息悦び宿祢小別を告て出雲と我足と都上り。朝廷の官人小就て蹶速と競  
 力しれり願ひれを早速官人其首と奏聞し。勅許有ふより大内の庭上  
 小相撲の場をうき蹶速太息兩人を呼出と競力すたよと命せられ小蹶  
 速ハ心中小嘲りし此奴出雲より遙くと死と望で上り多と不便なりとんよ  
 く一脚小蹶殺し得まんと飽と誇り裸なり犢鼻禪の紐曳きて角力乃  
 場へ出たれ。太息も裸なりと出する。堂上小帝出脚在り脚簾を垂  
 て勝負と膚覽なり。小簾外小大臣小臣位陞小依り列座。堂下小諸士下  
 官群りて見物と。先蹶速が体をみる小身材七尺五寸小て色飽と黒く眼  
 星のぞく光り鼻隆準鬼鬚臆のぞく小茂生手脚の毛ハ熊のぞく所小力痛  
 しくと即立さかき金剛力士の怒るが如し。又小勝向太息ハ身材六尺四五寸小て

色浅黒く鼻高く眼秀満身肥太りて是も手脚小力溜あまうと頭も天晴の  
 カ者と見えたり。上下の着官何方が勝何方が勝負と行唾を吞息を結て内  
 小頃て兩人互にお互上り寄つてあれつ皆一先争ふと云る間中なく双方  
 無手と引組押つ戻つ様合程小両士も希代の力者多れを大地をどろくと踏鳴  
 一互の汗を滝のどろく曳く声を出し半時むろ挑合多れをいまも勝負ふさを  
 られを諸人酔るごとく手小汗握て瞬もせむる所小太息が運や尽くろん  
 速の腕を揃し汗腕汗小にまでわかれを思むとろ所を早く蹴速六付て雙  
 身の方腕小入大喝して嘯と突れむ。さゆの小勝間三回後（翻）リ付多ふど  
 速透さず飛くを鉄脚を揚て太息が腹肚を續き多ふ三脚をろ踏多程小何  
 うハ以て堪るべれ忽ち肋骨と踏碎れ太息其後三言と言も言も庭上あて死  
 々帝ハ是を睿覽在僧一と思召蹴速勝負小勝しを睿慮悦ひのす

脚不與氣小入脚たのし猪脚とて蹴速を己心疎れを天晴小勝間勝よ  
 うと初らぬ人もあつる小案小相違と蹴速勝をとろし列位望を失  
 ひ誰一人蹴速が勝を譽る者もな。堂上堂下あけ交り太息が屍をとを  
 収めさせ其日の角カ借止り。それろ蹴速が愈慢心増長一朝廷の公卿小非  
 礼をなす更以前小十倍多も（満朝の百司百官末くの下郎小のり）で渠と  
 疫病神のどろ忌悪々去程小勝間太息蹴速が為小角カ小肩其場小く  
 落命せし更緒國小隠たり。出雲國（中）でえれを野見宿祢大少強太息  
 が死を悼と蹴速が挙動を憤むも母の病いも平愈せれを牙と咬でど目と  
 送り多。無小宿祢が母日小患病薄られれ。一日我子と呼てやれ多ハ先頃  
 より人の風貌小ハ你が友の小勝間太息都て當麻蹴速といろ人と競力を  
 對手小負て命と亡ひ。いも便なれ更たり。你と太息とハ兄弟よりも交り深

多し其仇をも復さず他小史捨る義小疎尔小似たり且太息が妻及び渠が  
 親族も你を言甲斐なりと恐むる。此頃我患病日小忘り今平愈する小  
 程もあらず。されど我病を念ふ小けど。日由早く都上り彼蹶速と競力をりて  
 太息がよ小仇を復せよ最も勝負ハ時の運小れむ。你彼蹶速乃さ小力競  
 小肩て命と落さとも朋友の信ハ至極。疾く思をい。義を勸励しんが  
 宿怨大小怡ひて拜謝。是ハ難有御教訓を蒙りしものも其素リ一命と  
 抛く太息が為小讎を復まろく。抑ひい。我母患病小深くを見捨  
 てるハ子さるの道小あらず。朋友の信も孝道小換が。今日まで黙止い  
 小母の病追々急りの上今まで御暇を給り。上六都上り蹶速と力と  
 競い争して。俄小奔足の準備。親族家僕など小母の身の上を困小の  
 ぬれ老母小辞を告て邸舎と立出勇々進んで都を望み路を急だつ。往

くて浪速國横津小も著し。當國小跡を垂る。住吉明神(奈泊)。老母の  
 無吏を祈り。且今度都小蹶速と競力小勝吏を得さ。めり。丹城  
 を疑して初念。これより大和國珠城の都上り官人小就て。是ハ出雲國の住人  
 野見宿禰と呼者。おて。當府蹶速と力と競。遙く上り。阿万望此言と  
 奏聞。り。玉る。願多れむ。執奏の官人承諾。右の由奏聞。々々。小即ち  
 勅許あり。る。官人蹶速を召出。宿怨と競力小争。言渡。れ。蹶  
 速。議小も及ぶ。領掌。て。退れ。心中小独笑。野見宿禰と申。人彼太息が我  
 一脚の下小命と落せ。と不知ん。我と力と競。人吏を望。火小入。夏の虫小ひ。く  
 好んで其身を亡さんとす。愚さ。己も思。人小言。其日遅。と。待  
 小々。斯て。禁廷。先例。殿前。大庭。競力の場。構。高座。出脚  
 在。百司。百官。堂上。堂下。小忝列。吏已小整。正。官人蹶速。宿怨。兩人を



呼出ーカと競る由を命ず。兩人低頭して令と受俱に退き衣履を  
 脱赤裸小わけて立出る。蹴速が人表前述べられし不及す。人々野見宿称如  
 何ある人品ぞ見小。身材六尺七寸。色白く目秀。手脚の力痛節立彼太息  
 小比れが段勝一壮士あり。それも蹴速小比て尚見劣せられ小。諸人心  
 中危く勝負如何あると手小汗握く見物せり。去程小西雄互小揖しや  
 うけ声するや否俱小寄合して刻合追廻し。組解いつ争ふ。蹴速ハ十分  
 小對人を見慢り一様小拉付んとすれ。宿称ハ天性狂捷の達人ある上。機人  
 小勝れる壮士もれ。對人の虚実と考呼吸を量り或透し或三廻りて千  
 變万化の手と確た蹴速が疲る。待ひたる。案のて。蹴速ハ只一舉小勝と  
 とんと思ひの外宿称が小繰繰れて六七分の精かと勞し。大も怒りて面  
 色火のどくなり。頭上小煙を立叫び吼りて掴らる。宿称ハ尚も繰り透し

前小在る。これか勿忘馬として後小廻り左小在ると。これか勿忘右小出其疾き更  
 蝶鳥のくくもれ。蹴速さ小見留る更能く。此精神疲し呼吸已小早鐘  
 を撞が如し宿称ハ蹴速が力の挽くと案して。一点の透向を付入惣身の方と  
 腕小入大喝一声曳やと言さる蹴速が胸板を撞と衝れをき。その大の漢屏風  
 を倒す。ぐぐく仰き小喘と仆る。宿称ハ透さず走り力脚と揚て蹴速  
 が肋骨と續さる小蹴更四五脚。此のあを敵の胸板を臨し。磐石の確よと  
 力と究て踵くと踏れ。何れか堪る。蹴速ハ胸骨肋骨と踏折し叫び苦  
 し。目より鮮血を吐て手脚を張其終息ハ絶小る。是を今堂上堂下の  
 公卿大夫下官小ゆる追まらやまらと譽る声遠近小震ひて少時小鳴り止  
 む。下郎の輩ハ日来悪しと。宿称ハ蹴速が肩より成嬉とて庭上小躍舞中あり。其  
 屍の除へま寄て土砂を蹴らる。唾を吐らる。宿称ハ念願の如



野見  
宿称



野見宿称  
当麻  
躑速  
力競  
の圖

当麻躑速

新編 野見宿称 巻五

大鳥の仇を復して心中大に悦び殿上の御簾の方を三拜し徐々として退たるる  
 帝甚しく辱感在り改めて宿祢を階下召よ以後八禁門守護の役を勤むる  
 一の宣言と下され執政の大臣小殿速が二族を追拂ひ其所領の地を悉く宿祢  
 小よふと勅詔ありしは是れ依て宿祢の思ゆくは朝廷の臣下とたり  
 多くの采地を得て悦ぶ更限なく深く君恩に謝し多かりし殿速が宿祢の爲  
 小其腰骨を踏折るるといふ當麻の田地と諸人腰折甲と言ありけるといふ  
 宿祢と殿速が競力本朝相撲の起源となりて其後朝廷へ折く諸國の力者と  
 召よ競力とせよと與せよとの事と八成り然れどもいふと定りたる式法とを  
 おろりると野見宿祢時小考へ相撲の式を定め又角力の手と定る所  
 相投緊捻旋の四年かり手小各十二年づつの変化ありて四十八年となる是れ近  
 競力の力量の強弱を競るものとす稍もこれを對人を投殺し蹴殺しなど

まゝれども斯て八國争の基ありて人を損むる甚く宜しうせずと對人を殺  
 更と堅く禁じり。されを其以後角力小對人を殺す更止す。此野見宿祢が  
 則ち菅家の鼻祖にて相撲の祖神と仰れ出雲の大社の末社の中祭られ亦  
 泉州石津の社の撰社小大野見宿祢命と崇祭せり角力道小依人の心と  
 尊信すむる神なり

因小曰朝廷相撲の節會ハ皇四十五代聖武天皇の御宇神龜三年七月  
 二十八日初て諸國の力者召よされて禁廷小於て角觥をとせり是れ角力の  
 節會の起源なり是より年中行吏の二とあり朝廷より諸國の力者と召抱小  
 遣り小官人を部頭使と綴り撰相撲の式別小書と著り季々述せ  
 心茲小畧とす

尽しを帝の御覺也他の勝進官位を進めしむ。茲に禁廷の皇  
 后日葉酢媛命崩す。此頃、大和國杖城の盾列の池前の陵に葬り  
 ちる。帝と定むひつる。此頃、大和國杖城の盾列の池前の陵に葬り  
 女御小御身近事。公卿女臣其帝其女御山崩しを生おし御葬  
 リ小殉ふありあり。帝仁此殉葬の義を深し悼ませり。此義を相止む  
 中や有と群臣と曰て勅回あり。多々往古より為きれる式法あれ。今更奈  
 何も轉ず。死せしむ。満座の公卿冠を傾け維入。勅答言上る人  
 かし。時小野見宿禰階下小糸候して先刺より諸臣下の勅答を如何奏聞有  
 や。耳と傾て聞居られ。一人の言と發する人あれ。見の堪て言と發し  
 小臣の思見ても悼あれ。心中存する言と啓奏せ。忠勤あらず。依て  
 愚案の趣を述べ。抑殉葬の更往古よりの式法と。ハヤせども。陵に生

かり人を埋殺し。不仁の甚。義と。單臣が愚見。依て墳土を以て  
 殉葬せ。る。程の土偶を造り。それを殉葬。象。て。陵に埋れ。其人  
 くの御暇を給り。宮中に出。殉葬の式法。相立。數十人の人を埋り。殺  
 する。わ。及。後代。勤仕。人の大患。除。仁恕の道を推弘。一端と  
 成。い。言。上。下。を。諸卿。実。心。付。帝。斯。と。執。奏。せ。る。小。帝。聞。召  
 て。御。感。糾。あ。ず。実。の。い。く。も。ヤ。セ。の。如。此。人。を。朕。も。何。を。患。ふ。死。急。に。宿。禰。命  
 命。と。殉。葬。す。る。男。女。の。形。及。牛。馬。を。以。て。造。る。と。勅。詔。し。り。の。一。執。奏。の。公  
 卿。王。命。と。奉。り。宿。禰。宣。旨。中。に。宿。禰。命。と。宿。禰。領。掌。宿。所。歸。り。出。雲  
 飛。馬。と。土。師。三。百。人。を。呼。上。り。自。己。指。揮。し。て。多。の。人。形。牛。馬。緒。の。調。度。を。て  
 不。日。造。立。を。朝。廷。献。り。を。帝。膚。覽。在。り。て。御。依。ひ。法。を。す。此。物。を  
 葬。り。小。殉。せ。埋。む。先。格。を。失。り。又。生。る。者。を。埋。殺。し。及。び。一。舉。兩。得。の。も。り

ら仁道是小過と御賞美在御葬送の式滞りなく相済り  
今度殉葬小預る命公卿女官今や生かす埋葬せらるる身身は蘇蘇心地心地恨恨  
小野見宿祢が妙業依て殉葬と免れ皆死死る身身蘇蘇心地心地恨恨  
かく衆人蔭かゝ野見宿祢を伏拜し神の神と尊尊とす

因小曰右殉葬小當り男女六命と助る助るも且葬小殉殉ひ休めれ休中  
小君使使れん更も觸穢の悼悼り有と悉く御暇を給り別小一村一村とす住め  
のひたり是を尸村と村上古の人を是と婚姻せず夫を俱俱せると今  
宿といひ穢村の穢と卑卑むる者古の尸村かると云

借り帝帝野見宿祢が今度の功績を深く御賞譽在御恩賞とて大和の國  
菅原伏見の里を賜り土師の職職任任せられ土師の姓を賜り多是小依て野  
見宿祢ハ世小美目と絶絶菅原の里小移住野見の姓を改て土師臣と自称

朝廷の御葬式の更を尊りたり

評小曰孔子曰孔子曰俾俾を作作る者夫後亡ん是其人小類する者と作る作るは  
たり也とも宿祢の如如是と且且同同と論論すかむと造物と造りて殉葬小  
換換幾千の生靈を助る更莫大の仁徳なり先哲も是を仁者の勇と謂  
命と譽置譽置まると宜宜あり其裔孫代々朝廷の臣下小列列今猶連綿と  
昌昌り昌更是天の報應と可謂己而己而と云

春彦是善俱感壽夢 於良香宅菅公試射條

土師臣より十母の末孫と從五位下遠江介土師古人と謂り謂る小古今  
思思れ思る思る先祖先祖野見宿祢墳土を以て土偶を造り殉葬の生靈と助助と  
て土師の姓を賜り我世小承承る今今の世土師土師の葬送小預る者者の名名心小快快と  
ど不如居住の地名と姓姓小せんせんと一通の玉言玉言を造り時の帝帝先仁天皇先仁天皇小捧

て土師の姓を改め菅原と姓の賜らん事を願はれしを即勅許ありける也古人  
 怡ひ其より土師を改め菅原とせしめたる時小天皇 備古人之子息と菅原清公  
 とのり。博學多文とて大學頭小任せし清公の子息と是善とせし是  
 善の字を秀とせし文章の博士大學士小任せし是善卿曾て妻伴氏と  
 娶ん夫婦の中睦まほしき如何なる事や年と重れし懐妊の沙汰あり  
 多れは是善卿是を愁ひし伊勢大神宮の神官山田の渡會春彦從五位下 代  
 菅家の御師ありて内外両宮世継の男子と授けり是等祈禱せし家士  
 嶋田忠遠とて武士と使者とて勢州山田下各春彦小世継の男子祈願  
 義を頼み遣はれし春彦繼で領掌。其日沐浴春戒て両宮と私宅  
 へ勧請し菅家世継の義を丹誠を凝し祈りし小七日満する夜の曉小春  
 彦不思議の靈夢を見し所高天原と覺し是等の緒神在せる中より

六七枚の神童を出し春彦小向ひ菅家の小世嗣を祈る事候  
 の天帝其丹誠を感し丸を以て菅家の世嗣とありし丸彼家小  
 生とたを且暮你と睦み交る座と告めし是等夢に覺る春彦大  
 始ひて想らば夢ハ臍氣の二子あり事小の思夢とて思夢を夢し入る  
 事ありし是も是ハ神明我が誠心を感納在し丸ありし正夢小疑ひ  
 とて兩宮と拜祈願成就の祝詞を上靈夢の事と菅家言上承  
 和十二年夏のより山田を奔走と都と上りたる是小菅原是善卿ハ世嗣祈  
 願の義と渡會春彦頼み自身も朝夕伊勢兩皇大神宮と心中祈念せ  
 られし小承和十二年夏月上旬一夜の夢小詔の庭中と道遠せし  
 遣水の上なる處殿の肩小羊の頭五才をりある位高麗三皇子の容貌美麗なり  
 是と傳居る也是善卿夢心不思議小思し你ハ何國より來りたる父母

と何國の難と向まざる小童子袖をうけ合せ九八父や母や君の子と  
 あまやれく此処へ来まると其く八子とよみて慈愛を垂のつと長者と答  
 ぐるは是善卿大い悦あり是天子此子と授我家名を相續せやま  
 ちんとお點首よこを来りのいふま子家を嗣す九男子ふれが今より  
 你を子とせしと抱えんと誼へんと思われを忽ち眼覚て一場の夢なりけ  
 り。是善卿大い望を失れ借八子年来世嗣を得ん更を欲せぬとる思夢を  
 せんりと本意なくおひて二兩日過されたる小りの渡會春彦勢則より上り  
 来り。是善卿小獨して靈夢を蒙りすと語りたるほど。是善卿奇異の思  
 せられ斯て八子先夜に思夢ありあて正夢たりと頼申す。おひ春彦  
 小八子の引出物とよて啼しめられ果すと北堂伴氏其月より妊娠ありこれを  
 是善卿悦び斜めを胎養遺る方なく心成添月の満る指し算て待れるか

裡かく其年中暮て明を承和十二年乙丑正月北堂聊も産の悩む平小玉  
 の下ん男子降誕あり。是善卿の悦ハハを更なる誼の上下勇と始むと  
 り者かく一門縁体の人より慶賀の使者門前市をたぐる。是善卿八望の如  
 く世嗣の男子と儲一更偏小渡會春彦が祈禱の丹誠小因とらたると。平産  
 の更と使者と以勢則山田の春彦が告知され春彦も大い悦び使者  
 とは道と祝の爲都上りたり。然小菅家小誕生の若君何たる由や出生の  
 後昼夜啼むつりて止む子。是善卿御夫婦是を厭れ藥湯を用ひ或神の  
 守れ佛の咒符など成樹をせ百般手と竭されれも曾て其驗もかく啼むつり  
 更止むられ。比皆始むとてあまされる小渡會春彦の使者と伴して京者  
 菅家(泰と)若君の御誕生を慶賀し。おひ首あれは是善卿願ひ北堂の両舎  
 (泰り若君の御良を見よ)子小誠小玉の御男子おては。先年夢あり。

神童の面貌ふ露違はれし中奇異の思ひをすすもち若君例の如く頻り啼ぶ  
ふより。春彦其也を向む乳人等。脚誕生あつてより。以来昼夜とも啼むつり  
より。醫業加持祈禱百般手と及せども啼止むまじきと。結るふと春彦懊悩  
おかりし。試み乳人が抱ゆる若君を抱ゆるも若君ハ春彦の面を人むひて忽  
ち啼止む。以て完示る笑せむのいれむ。北方を先より乳人侍女們も是ハ不測ある  
更ふとて乳人侍女們の手へ抱えむ。又啼出のい春彦が抱ゆるも。これ啼  
止る由。是善御も不審の更ふ思れ春彦と。鏡小苗て若君と守傳を各よの  
る春彦も若君の斯馴添るふ付て脚側を離るるす。不忍山田の私宅の字  
息春躬在て家敷と。脩る小更足も身ハ菅家小苗り家士の如く。昼夜とも若君の  
側を去むと守傳れり。此春彦ハ若君の頃より白髪長く生三十才過てより。頭髪  
盡く白く成るも。世人皆白太夫と異名する。菅家の若君と推名と。阿子と。又三呼

るが三才おあむの頃より。春彦を白太夫と。呼ひて。亦も。馴睦のいさ  
か。一時白太夫若君と。肩まのせ乳人侍女も。付添て物箱。其啼路内裏の談天門の邊  
を通り。若君春彦も。肩まのせ乳人侍女の額をついて。あがめ。い小館へ。帰りのひて  
後。自ら。みちある。手ハ。筆と。紙を。のび。談天の二字と。書。其筆勢。自茲。空海和  
尚の筆。意。似。う。れ。是。善。御。と。首。と。春彦。乳人。其。余。の。輩。も。驚。嘆。此。若君  
漸く。三才。お。あ。む。の。い。ま。手。習。ゆ。む。が。内。裏。の。門。の。額。と。目。足。て。早。く。其。父。字。と。記  
憶。も。ひ。て。書。の。の。ま。あ。き。筆。勢。墨。色。凡。あ。る。人。の。在。乎。後。世。恐。る。事。と  
衆人。舌。を。卷。て。心。を。感。ず。是。善。御。脚。夫。婦。も。是。を。奇。く。信。脚。寵。愛。深。く。是。より  
若君。を。菅。秀。才。と。ぞ。や。斯。て。七。才。お。わ。り。の。春。其。頃。博。学。宏。才。の。中。え。高。麗。都。の  
良。香。良。香。都。と。り。人。の。許。入。門。せ。れ。筆。道。文。学。と。学。を。せ。れ。る。小。一。を。聞。て。十。と。知。り  
俊。才。あ。れ。師。の。良。香。自。驚。嘆。せ。る。も。更。數。度。お。及。び。り。斯。て。文。德。天。皇。の。齊。衡。二



年菅秀才才力なり其正月の半頃春の夜の生快く露庭前の梅花も  
 咲白の梅月妍を争ひて限なく面白景色なり其是善卿飽ねる余與  
 を催され菅秀才の向ひ你良香小就て物学ひされを持作の更をも少聞了  
 り今宵の風情を詩小作てんやと戯れ問はる小菅秀才唯くとして女も辞  
 する色もわく筆紙を扱て月夜即事と題し更小案と練りて体もわく  
 月輝如晴雪 梅花似照星 可憐金鏡轉 庭上玉芳聲  
 と一首を賦とてき出のひる是菅公詩と作の初なり是善卿大いに感  
 ずれ你いふ成童の幸小たも至むとてうる佳句と吐更予も猶及とて御賞美  
 あり我家を與する者此見たりと心中未頼母を思はる其後天安二  
 年十月小月獨與の詩を賦せれる其詩曰  
 玄々律迫正堪嗟 還喜向春不敢賒 欲盡寒光休幾干

將來暖氣宿誰家 冰對水面聞無浪 雪點林頭見有花  
 可恨未知勤學業 書齋窓下過華年  
 と作りゆくれ都良香大に感ず且感ずれ菅秀才の才機我の勝る更遠  
 我是か師も更愧る小絶とて自己慚愧し是善卿の館へ了對面ありて  
 賢息菅秀才の御更智才當世其右に者なり良香がこれ者の門下小膝と  
 屈すおれ人あらず願く小余人小就て學めりと辭退せられはる是善卿敢て  
 承りなく何条さる更のいぞ唯り道中門弟とて教導せられと強て頼られ  
 たる由良香も已更を得む此上師弟の名を除た學友と成てとも小文道を修  
 行しゆとて歸られ其後ハ心中小菅秀才を學の友とせり愈懇小交られると  
 せん諸清和天皇貞觀元年菅秀才十五才小ちをて元服しゆ小緯を道真と呼  
 ぶも是善卿の脚始なり及む北堂伴氏も斜あり小嬉とて小鶴龜の千世万世

うけて菅公の初冠を祝し一首の哥と詠せしる其哥の曰

久々此月乃うづもなるむらう家のくせども吹せてしうゆ

其後四年十八才にて進士及第一文章生を補せしむ六年二十才にて從六位下の

叙し九年二十三才にて文章得業生を補せしむ番助を進し十二年二十五才にて

正六位上を昇進し十三年少内記に任ぜしむ。御年二十六才なり其年の春の比都良

香の詠めて若た殿上人を聚り射と射て與合多ととて菅公至りのひうを人へ耳

語あり道真を儒家小生と常小扉を因圓を出し。字の窓の螢雪と集り。字

業小心を委らるるを弓矢あど半年かたりる。更も有す。本末も知ざる。下毎度

手跡跡又あど。我徒彼人ゆ後と取。反報の弓一手所望して耻辱ととせむと

談合あり。菅公のまりのを待受り。春日の長閑なるより。弓響て戯し。いあり。公

も慰み一手響り。弓とて弓箭をき。付れ。菅公早く其結る意と察し。少の辞

する色なり。是六九折ふ赤り逢う。我も一手侍んとて弓場ふ出。弓箭をう

て的の小向ひより有る射と治り整ひ。射術鍛煉のま身の備も斯や。その許あり人

々案不相違。猶形容をう賢。其も真の事。其も息を結て見居る

うち。菅公を移し。ひを定めて。切て放し。其矢過。どの真中。お発止と中

是を始として十枝の矢一枝も空矢なく。多くの射中。一更。誠。百。百。中。も。溜。つ

る。手。煉。かり。ま。め。と。衆。人。憫。果。我。を。忘。て。呼。感。ず。る。む。ら。う。ち。都。良。香。先

刺。し。り。物。落。陰。在。て。見。物。や。れ。か。感。嘆。の。あ。り。ま。出。て。大。小。賞。美。種。の。出。物

を。進。せ。酒。宴。を。催。し。て。管。侍。ま。ら。う。其。後。元。慶。四。年。小。御。入。是。善。卿。典。去。あり。菅

公。御。年。三。十。六。才。なり。其。翌。年。正。月。加。賀。權。守。と。兼。て。加。別。任。國。小。赴。死。の。次。の。年。任

満。て。都。破。り。の。則。ち。其。年。渤海。の。斐。頭。奉。朝。多。る。也。權。治。部。太。輔。と。な。り。存。向

使。と。い。かり。の。ひ。かり。誠。本。朝。の。各。臣。と。菅。公。の。御。身。上。を。や。め。り。と。云。く

皇統記 國會 卷五

五

猶昔公神と崇祭られり入道の御事跡六次の巻も委しく記す

陽成院憲鈎殿君御製 狂病乱行閑居條

陽成院の帝御成長かりの朝の公卿稍心を安んずる不圖御狂病発して百  
般乱行ありしを女官近臣們大おめておす其根元を尋ふる色情の裏に  
起まり其故は其頃鈎殿の君と世に雙あは美人在り是八仁明天皇弟三乃皇  
子時康親王後の光孝天皇弟一の姫宮おて御座せし陽成帝の御為六從叔母おて御  
年申上より違ふ長下のひる帝一度垣間見りて深く懸想しひ千束乃  
御文を通せりし鈎殿の君平く御甥の帝お則添玉りし流石はく愧  
うれまお思召て二度も御返りの文おなりまを難面ての過さるひる帝  
はいしく淳岩のひ一時二首の御製を遊ばされ彼陸奥の錦木あど十束小余る文  
の敷を封ふ切で返りし難面さなれぬ怒り今八玉の緒も絶るをうり物思上

あんと物あつれおちてめむひ御玉章の真ふ書てど贈のひる其御製ハ

筑波根乃峯よりおつる川の急をばよりて淵とかりぬる

とあり御哥の意ハ常川筑羽山を此面彼面の陰深く洞より流出る水美奈野川  
といふ川に落合て底ちぬ淵とありて朕も君を戀る心の積りて深丸思小沈むど  
との御製かろ白美や倭哥の徳ハ極む武士の心然も慰め男女の中にも和らむし書  
りて鈎殿の君も此御製を唾のひて感情を催しひかろふやを浅く思  
ひとまのハ争難面て止まらぬと御心解遂小船のりかふあぬり御返事の  
文をせりしを帝大お御攸あり頼て迎りし錦帳の内小玉の枕とめを  
むハ借老の御製深く是より鈎殿の君を片時も御側を放ちむと今や君電を  
蒙りしひ女御宮妃六國の巢守とかりて枕の塵と俱小積る怨のち方かく各心に命  
て鈎殿の君を呪咀すハ帝の御行迹を悪く風鏡し正しく叔母君と玉鉢近く召



異形の  
造り並に  
釣殿の  
鬼の園

異形の造り並に釣殿の鬼の園



異形の造り並に釣殿の鬼の園

異形の造り並に釣殿の鬼の園

よせ幸ひのよ六世の乱る端なりぬ言觸り或釣殿の君の帝の寢殿へ逼ひ  
 寄て幸ひのよ六世の乱る端なりぬ言觸り或釣殿の君の帝の寢殿へ逼ひ  
 らうり種々怪死の者造置て怖れおとれ素り心弱し御本性の鈎  
 の君度く魔まのい遂に重病おとす帝大に疾をせの典茶の醫  
 官小委諸寺諸社小勅詔して加持祈禱させの露をりの験もたつ終小空く  
 成のいふふと帝の御悲歎限りたの李夫人別と漢王の悲と揚貴妃後  
 唐帝の歎きも今御身の上となり哀涙お御衣の袂を括しは是より何となく発  
 狂おせり局の女房の寐さぬ思ひで渡御なり其黒髪を振より非  
 くと剪捨せり銚をひて寐する宮女の陰所を突て殺し一時由あり一時近侍  
 の臣下と科められ御剣にて御手討ちり聊か御意お叶はる更われ男  
 女の差別なく御太刀を抜りて追廻し斬殺しゆあり傷けのゆウウ手彼鈎  
 殿を咒咀せ女官承く御下討遭多ゆ維がゆと帝の御狂乱鈎殿の

亡魂の為業なりと言出りや夜陰おおむ長陞中殿おとて鈎殿の君乃  
 瘦細り白た衣の上小丈なる黒髪を振乱し物凄れ面白く停立のよ見受  
 怕き魂断て阿絶しとれ心神悩乱病困む女房達もまろろ帝お狂病  
 愈厲し一時八寮の御馬小駕れ庭上より御殿へ騎上宮女官人們を駈け  
 のい又一時八官女を裸鉢小と庭上追下大を闘はせ怖れ惑を興し或ハ  
 地下の男女と捉て樹の末へおせ下より戦をひて突殺し或ハ蛙を多く取寄せ  
 蛇小吞せ大と猿と噛合させの偏殿の討王の行迹お異ある後  
 と女房諸臣も恐怖て御前お仕る者一人なく斯て八帝位小在さん更奈何有  
 んと危踏ぬ人もなろろ紫撰政基經公思慮を回らされ一時君の御前へ伺候  
 一頃日八御徒お見えさせ明日臣等御舎にて三十番の競馬を催し睿覽お  
 典へまろいんあ御幸なく給りいと奏せられ帝お御生得馬と誣る更を好

中む上御後其の折かれを大不悦なきの皇子細かく執許あつたると。基経公疾  
 より二条陽成院の殿中小室を構へ四方小蜘蛛を入如何なる怪力勇悍の者なりとも  
 押破ぐられず小まつひ置帷を垂る是を隠し翌日早且小御迎のつめ赤肉あり  
 くれぬ帝ハ欺練とハ露知むと空輦小乗て出御なりしと。基経公ハ御隨臣  
 駕輿丁們小密意を言會足早小陽成院ハ渡御なり進せ暗小御劍を奪とり  
 件の二室入より外面より扉を固く鎖されぬ帝大ハ驚きせしは如何計らひ  
 ゆるやと問ふ小基経公威儀を正され恐あがり君御狂病募らせしハ科めたる者ぞ  
 數多傷つせもふかへ天照皇大神への畏り小御位を下しなり此御所にて御保親  
 進せしなり願ふ脚心を鎮めし静小御養生はるるやと奏聞ありしと帝大ハ小  
 泣悲しむし小謝りとも叶せむと遂小内居の御身とおせりしと力わね基  
 経公ハ禁廷ハ帰られ火急小使者を廻し緒卿を集へ王上御狂病頻るる也

密位をすまふ奉り此六何の宮より王位小即なるを評議ありしと小衆  
 其身々の貝以肩の宮方と勸めて群議さし決せず左大臣融公正しく嵯峨天皇  
 乃皇子めれを我こそ帝位を踐むるを其色を以められしと。基経公承引せ  
 られず一旦人臣小列りたる人踐祚あり例ありと。故仁明天皇弟三の皇子の時康  
 親王仁徳を備へ節儉を守り已て小人を礼ふ賢君なれを此君を九五の位小即  
 ちも小如くすとて時康親王を五十八代の帝と申せんと定められしが大納言藤  
 原良世曰く緒中納言在原行平曰源能有と首とて満座の公卿面を見合ひ  
 彼時康親王之行迹正た君あがり脚幸已小五十五才かて余り小年圃の且先達て  
 其死去あり釣殿の君の御父なり彼釣殿の死靈也小先帝狂病を発しよりと世  
 小風説とれを上皇の御憤りも量る又御舅曰前の宮と帝位小即られ人更奈何  
 あらんと思われども當時権勢肩と並る人あら棋政の釣かれを維一言と発する



光孝天皇御即位 行平詠述懷歌彼為嫡條

時康親王其經公の吹舉小依て遂小入皇五十八代の帝と崇められし是を  
光孝天皇と奉たり則ち仁明天皇の皇子とて御母贈太政大臣經公の  
女澤子とせり先年渤海國の使者王文矩といふ者時康親王を相し  
此皇子大不貴相あり後年必皇天位小即むと云ふ其初諸人信せ  
ず王文矩相法不疎と排撻する其言のどく今晚年やて帝作と踐み  
るおど諸人初て王文矩が先見の明かりと感んたり又藤原仲實といふ  
人を相するが密其會弟宗直小向ひ你時康親王小く心を小て仕むれ  
彼君の骨格尋常小あらず後必と帝王小あせり言ひたり是す王文矩  
小劣さる相法の達人といふる去程小光孝天皇元慶八年二月三日小御即位在  
ま一月年十月大嘗會と執行れ翌年正月仁和元年と改元あり先帝成小太上天

天皇の尊号と贈りむ其經公の撰政を止れ関白とかり是本朝関白の權と  
かりそれ撰政撰め統るの義と帝御幼稚小在する或は文帝の若く先帝の如  
く睿慮不正の君の脚病身小て朝政を聽も小吏能公の時の官職たり関白と  
後漢の代より始りたりと云ふ関白と刻字義も是君の裁判より小吏を関白と  
下通達する官職たり王上光孝天皇其經公より御年長しむを撰政無用の  
官名は是を止れ関白とかり其後関白其經公撰津國の内小て遊獵の地  
を賜り刺其經公の五十の賀を禁中して執行せむ其經公の脚子時平卿十六  
小成ま々成也禁中して元服するは王上御年づり冠加ひたり我小前代いふ例  
なれ義と諸人羨思ふがかりたりは年十二月仁壽殿小於て僧正遍照小七十の賀  
を給ひたり是は遍照いふ良峯宗貞と言順彼渤海の使者王文矩が未朝せり  
時宗貞其饗應の役を勤め時康親王もは席と睦く交り進み御好身を



思君の故と云。去程小帝八御博織か上御年園又万機の政を聽召小御裁判  
 明ふて仁政を專とまのひ小松の宮小在せ時市民もや小金銀を借用せし  
 一成り今度悉く召出れ利足を加へ償ひをかりおひ多下下の人民帝徳と續  
 美一天膳名君もて大不悦伏。四海波静小治りたる時小帝御生得遊席  
 を好まざる神泉死小御幸しりて。雁鳥を放して池の鳥をとりも其他所へ  
 御狩の御幸ありたる。仁和二年十月廿四日御狩の御幸なりと云。或臣下の  
 中任せ中納言在原行平と大雁鳥の雁鳥飼を宣下しり。抑在原行平と云  
 平城天皇の皇子阿保親王の嫡男小業平の會見かれも王氏を出て遠くす。私仁  
 九年小誕生せられ伊都内親王養子とせり。天性明敏聰慧小幼年より  
 經史を學び才機諸人小勝と天長三年在原の姓を賜り承和二年藏人頭小補  
 せられ齊衡二年從四位小叙。因幡守小任せられて其任國へ赴く折京と出るとて

忍びて通ふ女のひとり一首の哥と詠つる。其歌小曰

まよひれりふむの山乃峯小おるまろく。まよひ今う人。まよひ

此哥勝とる秀逸なり。世人賞美しあひ貫之由古今集小加へり。斯哥道

小も達し博學宏才小て經濟の道中賢く。國益小成るれ吏をの是彼計定

りれれを元慶六年中納言小任せり。行平とる雁鳥と使吏小妙と得れ

る。卿相の中。行平小遺恨ある人君小勸めたり。行平小雁鳥飼の役を命じら

し。下。御得物まろく。まよひと奏しり。是行平小耻辱と子人の巧みたる。君

と何の御心ゆつせむと。雁鳥飼の宣下ありたり。行平右の倫余と奉りて大不

不與。我王氏の未棄とる上中納言小任せられ知余の齡をも過せり。果家の

役義を蒙ること安し。と憤りれれも倫言あれを辞退せんや。ゆりく已吏と得

と流く小領堂。志ふが心快く。と樂むと疾むの致仕むくる耻辱ハ蒙る

すきみのをよこ。意小浮むす。迷懐の哥と詠。一際花麗多。狩衣の袖小書付  
てそれを着。御狩の供奉小従。がれる其哥。小曰

八羽さび人あとかめと狩。ころもくふむらうと。と田鶴もわくある。

哥の意ハ我々年圃て若々。れ狩衣を著ると。老て蒼美と飾ると。緒人答の  
こらふ更あられ。是の中今日むらうと。明日官職を辞す。身たりとなら。八羽さびとハ老  
る身小伊達を飾る更なり。凡て八羽さび小女さびあど。詠るハ爽々たる更。わてやうと  
寂る意ハ非と。神さびらうと。由社の魏と。とて尊げお見。こ有吏をい。かか  
お小帝路次。おて不斗行平の狩衣の哥と。御覽ありて。大不逆鱗す。彼が哥と  
我王孫。おて官中納言小任。せれ殊更年圃。さ小何。あうらる早芳の役を命。らうと。明  
日仕を辞して。退隱の身と。成命。の意を一首の中。おこめ。人おおめ。ととよ。とらふ斗  
とて田鶴も啼。たると。つねハ朕を恨。不徳の君。わりと。世ハ小颯聽。とる詠哥。たり

急だ追返。彼が官爵と。削て横洲。須磨。流罪小行。ふら。と。宣旨下り。れ。即ち

勅詔を。おせ。途中。より。行平と。追返。と。執事。君。させ。主上。還御。まり。て。後。横洲。國。須  
磨の浦。を。左。遷。せ。れ。る。行平。ハ。思。け。あ。れ。罪。と。得。て。近。流。あ。が。り。禱。行。の。身。と。かり

力なく。住別。の。宿所。を。出。て。津の。國。須。磨。へ。流。され。配所。の。あ。ひ。ひ。と。矮。れ。飯。屋。小。入  
て。る。小。前。海。後。ハ。山。お。て。只。往。及。者。と。と。漁。する。漁。人。汝。汲。垂。小。女。の。と。お。と。磯。の。松  
吹風の音。も。寂。く。友。呼。う。す。千鳥の。声。も。哀。小。て。小。夜。の。枕。も。寐。覚。が。ち。ふ。ん。物。物。物  
腸を。断。さ。る。ハ。か。れ。を。一。首。と。詠。じて。都。の。友人。へ。贈。ら。れ。る。其。哥。小。曰

こころ小回ひとあ。を。須。磨。の。う。ら。に。藻。汐。れ。つ。つ。と。こ。こ。こ。よ

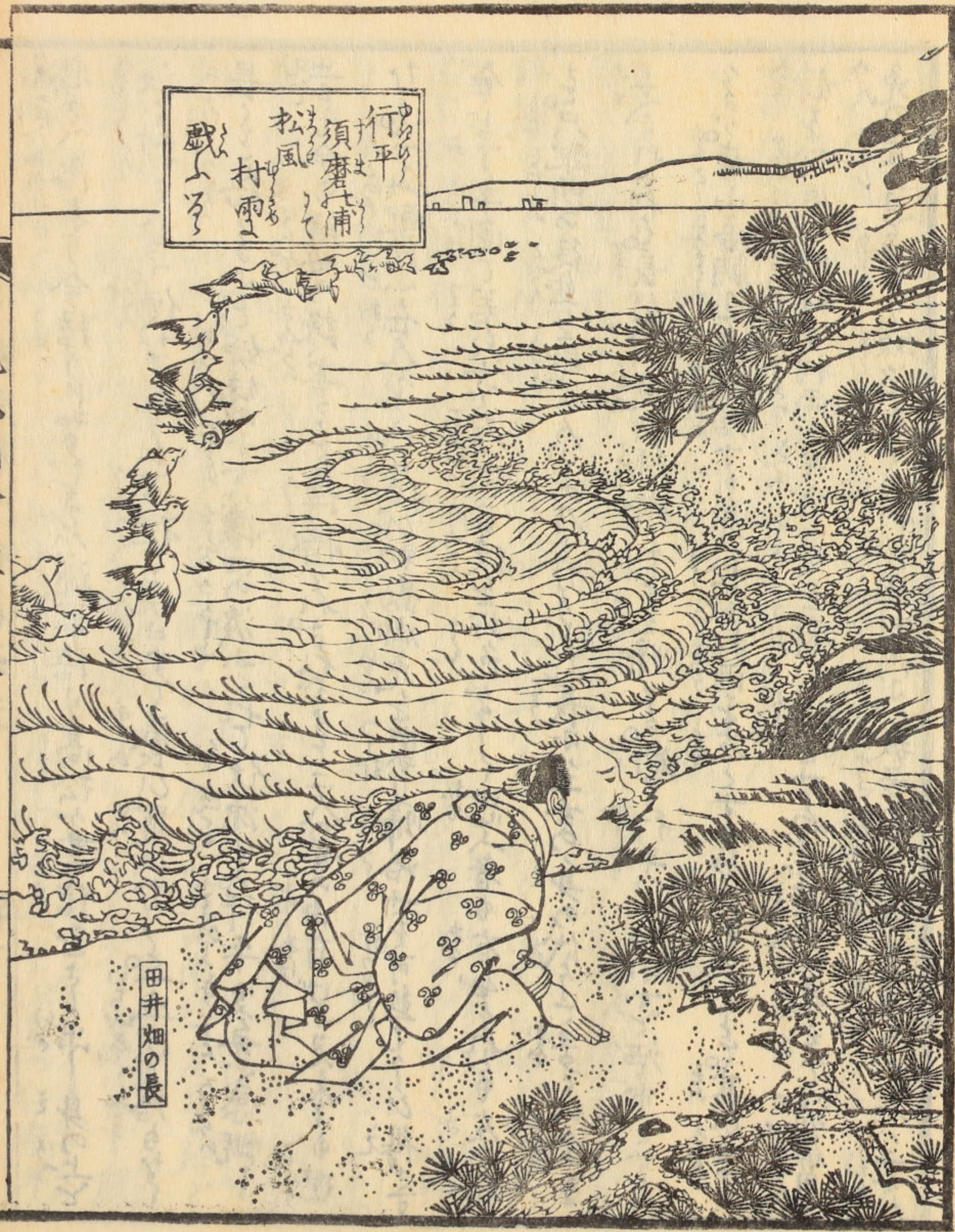
斯て憂配所不明。暮され。小。一日の。朝。後。の。山。より。鄙。び。る。声。く。小。何。う。颯。つ。れて。數  
十人の。海。赤。女。濱。辺。を。望。で。来。る。有。さ。る。将。小。一。行。の。斜。鳥。雲。小。連。り。半。天。の。雲。霓。地  
小。移。る。も。い。ふ。や。行。平。渠。們。を。ら。う。ら。ふ。其。群。の。小。容。貌。鄙。り。ず。由。あり。げ。ある

二人の少女余の番們より後れく歩み疲れし休みえんれむ。行平家士生田庄司（おまをとりこれよびきき）向ひ彼後より二人の番少女を是へ呼来れよと命ぜられしより庄司領堂（せうどう）掌して走り出三人の少女を將て入り。主君の目前へ連出て坐らせり。二人の女はいと畏入る体にて蹲り居り。行平釘をけ。你们は何國の者ぞ何方の里小任多と問れん。一人の年長しうと覺れん女。庄司は科紙をよ二首の哥と手早く書て。つぎふきし出りしより。行平奥ある妻お思れ手取上てんる。小其哥小曰。まゝ浪乃とよする渚小世をすごとと。番の子たれを宿めさざり。と書り手跡も無下小拙りふれを大い感ぜられ。借優れ者ともふ。実の任所を告よと再三問れり。小哥書り女答り。我姉妹はもと讃岐國の者。みてさむしひふ縁故ありて今此後の山の奥なる田井畑の長が許小召使れ侍。りしや。行平さて庄司向ひ。你彼田井畑とや人へ往其長とより。小對面

此二人の女を予が洒掃し得させよとをまりいと命ぜられしを庄司唯く。座を起田井畑へ赴けり。行平二人の少女小何是と妻問て。配所の徒を慰めらる。うち其日の黄昏お生田庄司田井畑の長を日道とて歸り。行平の面前へ伴ひ出る。行平長お向ひ。是か二人の女容儀卑く。汝汲業とせん。便か。妻たれを予が配所の洒掃させり。思たり。されを予得させよ。二人の女の語る。成歩を元。續剛の産あり。如何なる故。お方が召抱り。子細あり。物語よと問し。長は低頭し。數ある賤の女。由ある者と脚覽あり。脚目鑑を難有。此二人の少女の身上。衣れたる物語の。妻長も。脚尋や。結ひ。抑此二人の者。續剛の住人塩飽大領と。者の女。わて。小姉ハ。七才妹。五才の頃。母死亡後二年。まで父大領。後妻と。呼迎。程かく一人の男子。出生。一名。后丸と。呼て大領夫婦の。置愛。大方あり。彼後妻。初乃。程。二人

乃継子と所生のまごのうまとうま慈愛のあはれ小后こご九くが出生うまれ後のち二人の継子まごと憎やむ万まん妻さい難なん面めんて  
 の過たがりも大領おほなるの後妻のちのさいの色いろ不お濁なりて是これを悟さとむ姉妹あねいもうとの者もの憂うれ苦くを堪た忍しのび継母まご  
 小こよ仕つかへの継母まご八や猶なほ中ちゆう二人を憎やむ夫大領おほなる小百般ひやくぱん終しま言げん此この両女りやうにょと追亡おひさま人と謀まけり  
 兩人りやうにんとも堪たりて館たてを抜出ぬきだ大領おほなるが家長けしやう年とし礼れい兵衛べゑなる者ものの方かたへ至いたり尼法師にぼうしとも  
 かり亡実母むしやうじつぼの跡あとを吊たひおえり告つぐる小兵衛こべゑ主人しゆじんの女にょといいふ若わかれ姉妹あねいもうとと尼  
 法師にぼうしかせんせんをくは嶋しまの里さと住居すまひ一い族ぞく高松たかまつ何某なにがしと呼よぶ者ものの方かたへ二人の者ものと  
 預置あづかりいひ小彼こが継母まご是こゝを付つて又大領おほなる終しま言げん年とし礼れい高松たかまつ兩人りやうにん姉妹あねいもうとの女にょと金藏かねざう  
 て己おのれが側室わきむろとし御身ごみ死し亡なる後のち后ご九くを書かきて塩飽しほの家格けかくと押領おしりやうせんと巧たく  
 小こよ一い妻さい告つぐ者もののいと実まことや小告こつ多おほく大領おほなる其終そのしま言げん信まこと後のち添その勸すす不し任しんせ年とし礼れい兵衛べゑ  
 衛ゑと館たて呼よ寄物よせもの陰かげ小力士こりきしを隠かく置おけ年とし礼れい油断あぶらだんをおそをカか士し相圖あひあく不し意い  
 小こ房ぼう一い牢獄らうごく入置いれて後妻のちのさい暗くら食くの中ちゆう小鳩こつぐ毒どくを加くて遂つひ小兵衛こべゑと妻さい殺ころす

猶なほも己おのれが兄あにの阿波あま人ひとある者もの小命こいのち高松たかまつ何某なにがし謀叛ぼうはんのせえ隠かくれ急いそに馳向せむかむ  
 て殊こと仗たすけとと告つぐる小こよ元来もとより無道むどうの阿波あま人ひと一い様さまも及および年とし礼れい兵衛べゑ三百さんひゃく余人よりのひとの兵へい卒そつ  
 率ひらて高松たかまつが宿所しゆくじよ寄付よせつけ無な二に無な三さん小攻せうこう立たちて高松たかまつの思おもひがけあれ不ふ意いを伐うち  
 防戦ぼうせん已い小難こがた義ぎ小及おおよび二人ふたりの小女こにょ對たいひり矢やと身みはらる折せり小命こいのちと惜おぼしめ  
 小こよのいはれが某たれ敵てんき中ちゆう小斬こざ入いて思おもひが程ほど敵てんきと恨うらみが斬ざ死しにいれし御身ごみも我われ知しる  
 の者もの津國つくに湊みなとの後のち異烟いゑんの長ながが絆きり落行おちゆき彼者かのもの小身こみを寄よせて命いのちと全まり時節ときせふ  
 伏待ふしだて父大領おほなる殿どの小身こみ小罪こつみある妻さいを斬ざりて再びまた父子ふし和順わじゆんの期きを得えりと練れん小  
 是こゝ小こ姉妹あねいもうとの者もの杖柱じやうちゆうとも頼たのむ年とし礼れい兵衛べゑ高松たかまつを討うち死しせんといいふと力ちからと  
 落おちし注つぐ高松たかまつ小向こむかひの妻さい姉妹あねいもうと也なり小御身ごみ死し戦死せんしを何なんの面目めんめくありて世よ小存命ぞんめい侍ざむらい  
 小こよも小自事こじ日ひ道みち小往人むかうじんといふ高松たかまつ種たねく練れんすに從者じゆしやうと添そて後のちより落お  
 一い其身そのみハ遂つひ小敵軍てんきぐんの中ちゆう馳入せいりカカ小敵こてんきを切きりて斬死ざんしといいふと此この両女りやうにょ船ふね小



中野行平  
須磨浦  
松風  
村雲  
戯人

田井畑の長



皇統記圖會後篇卷五

十五

我方(わが)落(お)れり今(いま)結(むす)りいれしむら遂(ついに)小(こ)結(むす)り高(たか)松(まつ)が書(か)信(しん)をさし出(い)し身(み)の上(うへ)と  
 泣(な)く頼(たの)みいれ便(びん)なくおのり抱(かか)りて今日(けふ)まで養(やしな)ひ置(お)いたりと一(いち)五(ご)十(じゅう)と落(お)れり  
 長(なが)くと結(むす)る小(こ)結(むす)り姉(あね)妹(いもうと)の女(むすめ)の懐(なつか)しい涙(なみだ)あはれて伏(ふ)せし行(ゆき)平(へい)史(し)毎(まい)小(こ)感(かん)慨(がい)し  
 昔(むかし)も今(いま)も母(はは)の讒(ざん)害(がい)を薄(うす)く惜(おぼ)しむる二人(ふたり)の女(むすめ)の由(よし)有(あ)り見(み)えりも理(ことわり)  
 かり予(よ)此(こ)配(はい)所(ところ)小(こ)在(あ)るんら召(めい)使(し)ひ勅(ちく)勤(きん)御(ご)免(めん)を蒙(まか)り帰(かへ)り浴(ゆ)せを可(か)然(しか)らざる得(え)ず  
 命(いのち)予(よ)年(とし)園(いそ)て若(わか)く女(むすめ)を左(ひだり)右(みぎ)小(こ)使(し)を好(す)色(いろ)かき思(おも)ふ者(もの)有(あ)るを左(ひだり)小(こ)非(ひ)  
 とも只(ただ)配(はい)所(ところ)の徒(と)を慰(なぐさ)めんら乃(な)らなりとて長(なが)小(こ)女(むすめ)の身(み)の代(しろ)りて多(おほ)くの金(かね)を  
 与(たま)へられし長(なが)小(こ)女(むすめ)悦(よろこ)び拜(ひら)い謝(まが)りて主(しゅ)婦(ふ)多(おほ)く斯(か)て行(ゆき)平(へい)二人(ふたり)の女(むすめ)と酒(さけ)帝(てい)とせし  
 るるが唐(たう)山(さん)吾(ご)朝(あ)小(こ)も閑(ひま)居(い)する身(み)八(はち)松(まつ)風(かぜ)村(むら)雨(あめ)を友(とも)とするあはれをとも其(その)小(こ)準(じゆん)し  
 姉(あね)を松(まつ)風(かぜ)と呼(よ)び妹(いもうと)を村(むら)雨(あめ)と号(なづ)けて憂(うれ)を慰(なぐさ)む便(びん)とせし其(その)后(ご)三(さん)年(ねん)まで流(なが)罪(つみ)息(いき)  
 免(めん)の宣(せん)旨(し)と蒙(まか)り既(すで)に浴(ゆ)あり折(せ)松(まつ)風(かぜ)村(むら)雨(あめ)小(こ)數(かず)多(おほ)くの引(ひ)出(だ)物(もの)をよられし小(こ)女(むすめ)  
 免(めん)の宣(せん)旨(し)と蒙(まか)り既(すで)に浴(ゆ)あり折(せ)松(まつ)風(かぜ)村(むら)雨(あめ)小(こ)數(かず)多(おほ)くの引(ひ)出(だ)物(もの)をよられし小(こ)女(むすめ)

大(おほ)余(よ)波(な)を惜(おぼ)し泣(な)く御(ご)見(み)送(そう)を平(へい)して後(のち)姉(あね)妹(いもうと)とも小(こ)髻(むす)とて平(へい)して居(い)たり  
 亡(な)母(はは)及(およ)び小(こ)卒(そつ)礼(らい)高(たか)松(まつ)の後(ご)世(せい)を惘(むご)お吊(た)りし人(ひと)ら  
 清(せい)和(わ)上(じやう)皇(わう)御(ご)登(とう)霞(か) 禁(きん)廷(てい)種(しゆ)怪(がい)異(い)之(し)條(じょう)

前(まへ)太(たい)上(じやう)天(てん)皇(わう)八(はち)和(わ)陽(やう)成(じやう)上(じやう)皇(わう)の御(ご)在(あ)り病(びやう)と歎(なげ)れり是(こゝろ)是(こゝろ)朕(みづか)が兄(あに)宮(みや)惟(ただ)喬(たか)親(おや)玉(たま)一(いち)旦(たん)の  
 辞(こと)讓(やう)もなかり帝(てい)位(ゐ)小(こ)即(す)ち天(てん)照(しやう)太(たい)神(かみ)の各(おの)々(それぞれ)あはれ追(お)思(おも)召(めい)悔(くわ)すむは  
 遂(ついに)小(こ)御(ご)落(お)飾(か)飾(か)在(あ)り斗(と)敷(し)行(ゆき)脚(あし)のまゝとて近(あ)江(え)丹(に)波(な)撰(せん)津(つ)木(ぎ)の山(やま)寺(てら)と順(じゆん)拜(はい)  
 たりしは是(こゝろ)偏(ひと)ら後(のち)太(たい)上(じやう)天(てん)皇(わう)の御(ご)在(あ)り病(びやう)脚(あし)平(へい)愈(い)ふのまゝとて是(こゝろ)也(なり)も至(いた)り  
 尊(たう)の御(ご)身(み)とて寝(ね)くく諸(しよ)國(こく)行(ゆき)幸(きん)めは更(さら)に其(その)御(ご)在(あ)り所(ところ)を定(さだ)むるは主(しゅ)上(じやう)も  
 是(こゝろ)是(こゝろ)患(わづ)れは前(まへ)上(じやう)皇(わう)小(こ)近(あ)侍(しやく)奉(ほう)る公(こう)卿(けい)の行(ゆき)幸(きん)の度(たび)毎(まい)東(とう)西(せい)南(なん)北(ぺい)へ走(は)りて殆(たいてい)ど  
 迷(まよ)惑(ご)く一(いち)時(とき)閑(ひま)自(みづか)基(き)經(けい)公(こう)上(じやう)皇(わう)を種(しゆ)練(れん)奏(そう)しむる小(こ)太(たい)上(じやう)皇(わう)仰(おほ)る事(こと)朕(みづか)  
 近(あ)國(こく)の壘(るい)並(なら)場(ば)を拜(ひら)い巡(めぐ)る更(さら)に朕(みづか)の身(み)の後(ご)世(せい)佛(ぶつ)果(くわ)の為(ため)小(こ)わづと後(のち)大(たい)上(じやう)皇(わう)の狂(きやう)病(びやう)平(へい)

命を祈らんとあがり。朕近國を巡るとも敢て他所を尋る事及む。丹州水尾山乃  
 奥なる古木の檜の下と朕が居所とす。其の要用あるは右の檜の下に到りて待て朕  
 たく他所へ往とも遠く水尾山へ還るなりと宣ひ。其の更基経公も諸臣下の人  
 くも漸く心を安んずる。其後又例の如く仮初のまゝ出脚なり。更し還脚の  
 一むざんむ。臣下の面くまゝを丹州へ脚迎おそれよと。衆人水尾山へ登りて  
 果して年経檜の一大樹ありて樹下小塊の岩あり。其上古皇の御座具右に板  
 と兼ての勅詔あり。此所へ還脚なり。一日二日と待たる事更し還ら  
 む。更し余り待て。山奥より御座る更し。とて山残る所なく尋せられども  
 更し人えむ。是ハ不審なりとて都へ人を遣せ。閑白殿小斯と祈られ。自余乃公  
 卿も追々水尾山へ馳着群集て丹波二國の山々を尋搜し。されども猶御在所相知  
 じ。諸卿手と空りて。北岳と個果多小一の臣下彼岩上の御座具のの外薫り

ぬるハ如何と。いふぞ。列位氣成鎮め鼻息をきく。嗅ふ。実の御座具の香氣。御  
 羅沈香の中勝りて馨く。後ハ漸く小香氣高くなり。余薫山中ハ満ちり。多  
 人々奇異の思をたし。議して曰。昔天智天皇ハ崩脚の後脚櫃小脚沓の遺り  
 有て尊殿無り。とて。登天へむ。と。縋り。今上皇も正しく昇天。と。ちか。と。登  
 る。何時ぞ。此所にて待たる事。其詮有らざる。不如都へ還り。此趣を奏せん  
 小ハと衆議一致。御座具とて。皆都へ還り。有り。次第と奏聞。され。帝頗  
 脚疾た。あ。と。普く日本國中。山の奥浦の端ま。宣旨。傳られ。前太上天の御行  
 方と。尋搜させ。い。も。終不見。を。せ。む。宝。借。八。弥。昇。天。の。い。小。更。極。ま。り。と。て。即  
 ち水尾山を。陵。と。清和天皇。と。誼。を。奉。り。の。時。小。室。篁。三。十。一。才。小。か。せ。の。り。水  
 尾山を常小愛。の。い。水尾帝。も。や。な。れ。と。実。小。不。思。議。の。御。更。あ。り。多。其。後  
 至上御方違の御幸在り。多。夜。の。路。次。に。て。盲人。數十人。亦。連。が。ら。り。敬。言。譯。乃

宣使の追多る。大い周障途不迷ひ多と。至上室輦の内より脚覽在。不便乃  
 更小思言還脚の後脚沙汰ありて洛中左北牛と。街小店屋と建させ無縁乃盲  
 人を其所小て養ひ住せり。且さる盲人の官階を定めり。其上座する盲人を座  
 頭と言ひ。人せり。実小盲人も者。此君の脚哀憐を仰尊む。是れ脚使の後  
 年帝執萌脚在。後緒國より盲人們都より先孝天皇の脚忌日と吊ひ奉  
 るとて三条四条の川原の群集。七月廿日より廿六日まで脚追福の法事と。手更  
 年恒例となり。諸人は是をんとして川原群集す。残暑の節かれ。是と納涼  
 と。縹。但し脚正忌八月たれ。脚法事と七月の執行の。干藁盆會と兼行意  
 と。今。今の世盲人の官位を久我家より免授けらる。久我光孝天皇乃脚末  
 華族の故なり。盲人の官位の名目。右川原の脚吊ひ。小四々度上りる者と。四々と号し  
 八々度上りると。四度と号し。十二々度上りると。勾當と号し。十六々度上りる者を檢校

号。盲人の極官とす。凡盲人を疑ひ深れ者。て己們は士集會する。も座席乃  
 上下と争ひて。稍あるを。闘争あり及。多る。小斯官柱の。掟定ありて。より。其争ひの止る。り  
 偏小光孝天皇の脚仁惠。因と。と。ろ。て。難有る。り。仁君かり。り  
 因。小。曰。今。京都の。做。小。六月の。祇園會。より。四。条。川。原。緒。人。群。集。す。と。納。涼。と  
 稱。す。右。の。盲。人。の。川。原。の。て。法。事。と。な。す。と。見。小。集。り。遺。風。か。り  
 時。小。仁。和。二。年。の。冬。より。三。年。の。春。へ。け。て。大。衰。小。種。の。怪。異。あり。其。二。を。一。日  
 禁。廷。小。大。い。な。る。蠶。の。集。る。更。幾。百。千。と。い。數。ま。ん。す。其。形。常。の。蠶。と。大。小。異。あり。腹  
 大。小。脹。れ。眼。の。玉。も。大。り。て。黒。く。光。り。皮。膚。の。班。又。五。色。小。て。見。小。穢。小。く。這。更。甚。小。と  
 徐。小。て。啼。声。長。く。悲。し。衛。士。の。輩。大。小。怪。と。多。人。數。小。て。是。を。門。外。追。出。さ。ん。と。す  
 小。逃。る。更。も。す。と。徐。小。て。より。脚。門。外。出。る。り。と。ん。向。由。なく。又。跡。より。忽。然。と。數。多  
 這。出。更。小。除。限。か。り。衛。士。も。大。小。困。り。果。攫。を。以。て。搔。捨。れ。又。其。お。と。り。現。出



後く小八床へ這上る小御殿の簀子の下より長大なる蛇數千這出て上り来る。暴  
然呑んとす衛士も又是を怪む。攫退る小ゆて余せ。暴おれど却て僥倖の  
変よと攫を止てあめ居る小尋常ハ蛇が蛙を呑むひある小其トハ変変リテ  
暴ども口を張て蛇と呑る其勢ひ甚く恐る。或蛇の首より呑めり或蛇を二  
小啗切て呑めり其他種くして遂ハ蛇を吞る。暴ハ勝鬪を揚がごとく一吞小  
鳴て人も追ざる小御門の外へ這出悉く消失る。諸人拜して曰。是ハ先帝成蛙を集  
蛇小吞せて身づのひ其剛ひを示す多んと言合り。さ。時ハ御坪の内の松乃上ハ  
異形の人立て。手小弓矢を携へ矢を放つ。変毎夜止と其矢の落る所を以不搜も  
敢てまれば。直宿の衛士樹上の怪死者と弓矢と射小矢の中る時ハ消矢て間  
ゆなく又現れ。矢の中る時ハ瞳とこら其笑声ハ數十人の声のどくあれども現れ  
者ハ人なり。是も諸人の評ハ先帝罪ある者と樹頭へ上せて射殺し。其怨

霊の所為か。下と沙汰。右木の更を先と。或血ハ漆裸躰か。女の停。を  
を入。者中あり。或ハ無首。殿の歩行。せ。区者あり。其風鏡宮中宮外ハ隠かく  
女房達ハ怖惑ハ帝ハ睿聞在。と患ひのひ。仁和三。年秋の初より重死。御怒小  
海せのひ。百官百司。大不。致。緒。緒。社。命。加。持。祈。禱。を。修。せ。め。和。氣。丹  
波の医官ハ良劑を粹て御茶と調進。献。と。更。小。其。強。力。く。遂。小。八。月。廿。六。日。室  
筭五十八。女。小。て。萌。脚。か。の。ひ。る。と。哀。れ。御。在。位。僅。三。年。か。り。女。御。宮。妃。緒。皇。子  
姫宮の御歎。中。も。更。か。り。公。卿。大。夫。の。愁。傷。大。方。あり。下。市。人。農。民。も。悲。泣。せ。り  
る。ハ。か。ら。り。たり。然。れ。も。さ。て。有。果。き。小。あ。れ。を。御。葬。送。の。儀。式。を。整。正。葛。野。郡。立  
屋の里小松原。多。田。邑。の。陵。小。葬。を。奉。り。り。其。後。練。圍。も。畢。て。仁。和。三。年。丁。未。十。二  
月十七日。春。宮。定。省。親。王。を。関。白。基。經。公。大。極。殿。綏。ひ。も。り。五。十九。代。の。帝。位。小。即  
奉。ら。る。宇。多。天。皇。と。や。な。り。八。此。君。わ。て。在。せ。り。御。女。皇。后。班。子。と。や。仲。野。親。王。の。御。女

かり。此君ハ先孝帝弟七の皇子にて此時二十才カセリ。先帝孝皇子數多在  
 中。親王（小松宮）小松宮小あり。時是思是定定省の三人の皇子と石れ  
 御戲れ。自天子帝位小登む。你達何吏を望むと向せり。小脚嫡子是  
 忠ハ坊紫と賜り。仰れ脚二男是定。東國を賜り。曰ハ脚三男定省ハ春  
 宮小立ま。り。とて曰ハ。さる。依て先帝脚即位在て。後定省親王を太子小立  
 め。今度万乘の密位小即せり。と芽出度。然此君兼て内々王位を踐  
 ち。と御望中。く。侍従。て。頃。時。賀茂社。御社  
 あり。祈願を筆。世。人。更。知。る。小君登極の後。寛平元年。改元。を  
 其年の十月。脚祈願成就せ。脚欣悦。因て。賀茂社。初て。臨時の祭。を。執  
 行。谷。の。神慮。と。清。ら。ち。其。外。正月。元且。小。四方。拜。の。儀式。由。此。帝。より。始。り。公  
 日。月。七。日。小。七。種。の。御。粥。を。献。ず。更。由。此。君。の。御。宇。より。始。り。至。上。す。緒。臣。下

小忠勤を励と為小とて。南殿の庇乃障子小唐土代の功臣の画像を繪所  
 巨勢金岡小命と描り。是を賢聖の障子と称せり。南殿左右の庇小建  
 る東西各十二枚。つて都合二十四枚なり。其東方の障子小殷の伊尹。周の太  
 公望。漢の蕭何。曹參。灌嬰。傅寛。王陵。唐の杜如晦。房玄齡。虞世南。魏徵  
 長孫無忌。以上十二人なり。西方の障子小殷の傅説。周の周公。且漢の霍公  
 魏相。蘇武。劉禹。杜茂。唐の姚思廉。孔穎達。陸德明。褚亮。許敬宗。以上十二  
 人なり。抑巨勢金岡と呼ま。一画工。其頃無双の名人にて。曾て大内の森の尸小  
 馬と描れ。多小其画馬。毎夜。枝。出。て。脚。坪。の。秋。と。演。ひ。と。多。る。名。画。工。の。丹  
 誠を凝して。面貌。佩。帶。と。れ。の。傳。と。勤。考。寫。し。出。せ。画。を。左。あ。り。活。る。が  
 如。く。言。語。と。の。声。乃。は。多。る。我。耳。の。聾。る。が。疑。ふ。り。多。れ。君。と。首。く。甘。り。群。臣  
 其精密あると感致せすと云ふなり。後。年。延。喜。の。帝。の。脚。宇。小。小。野。道。風。小。命。と

此人物の續を書きしもの弥潤色せし此障ふたう。如此聖明の君おて在す亦  
関白基延公藤原良世卿菅原道真卿ふんどの良臣補佐ししれんは万機  
の政平く四海昇平ゆて万民業と樂と戸々ぬ御代とと稱る

都良香得鬼神奇句 菅公一時作十詩條

宇田天皇を補佐しし名臣の中も菅原道真卿八前も詔しし人にてハ  
在まじと不測の更ともまよりる其中の珠の奇異なるハ彼都良香一時初春ハ  
頃まは消くる正月の夜半あつ臆お霞む月の面白死す奥に乗とて邸舎を  
ま出其所ともなく逍遙し覺て東寺の羅生門の辺にり柳の風吹乱る  
たんと。不斗心頭お浮むま 氣奪風梳新柳髪 とし句と得得  
小是を我おる名句と得る。此句お相應するを我對句ゆがわと稍傳まと案  
成煉まるとも是とて思ふ對句心浮まるとも小忽ち羅生門の棟小其形

伯ろれ鬼神現と出高声ハ 氷消波洗舊苔鬢 一と唾しるる良香大

鬼神我を佐て此金玉の佳句と給りと拜謝とゆも勇と欣榮とて我邸舎へ

一懸の句と得い高判とたつとて言まるとも道真卿半おとて押頂ま

先上の句と吟し次の句と見て何とも思ひのひえ扇を用て居置座をまて手

小物学せれゆ師弟の礼義と重んぜらる成ると思ひ是ハ慇懃なる脚

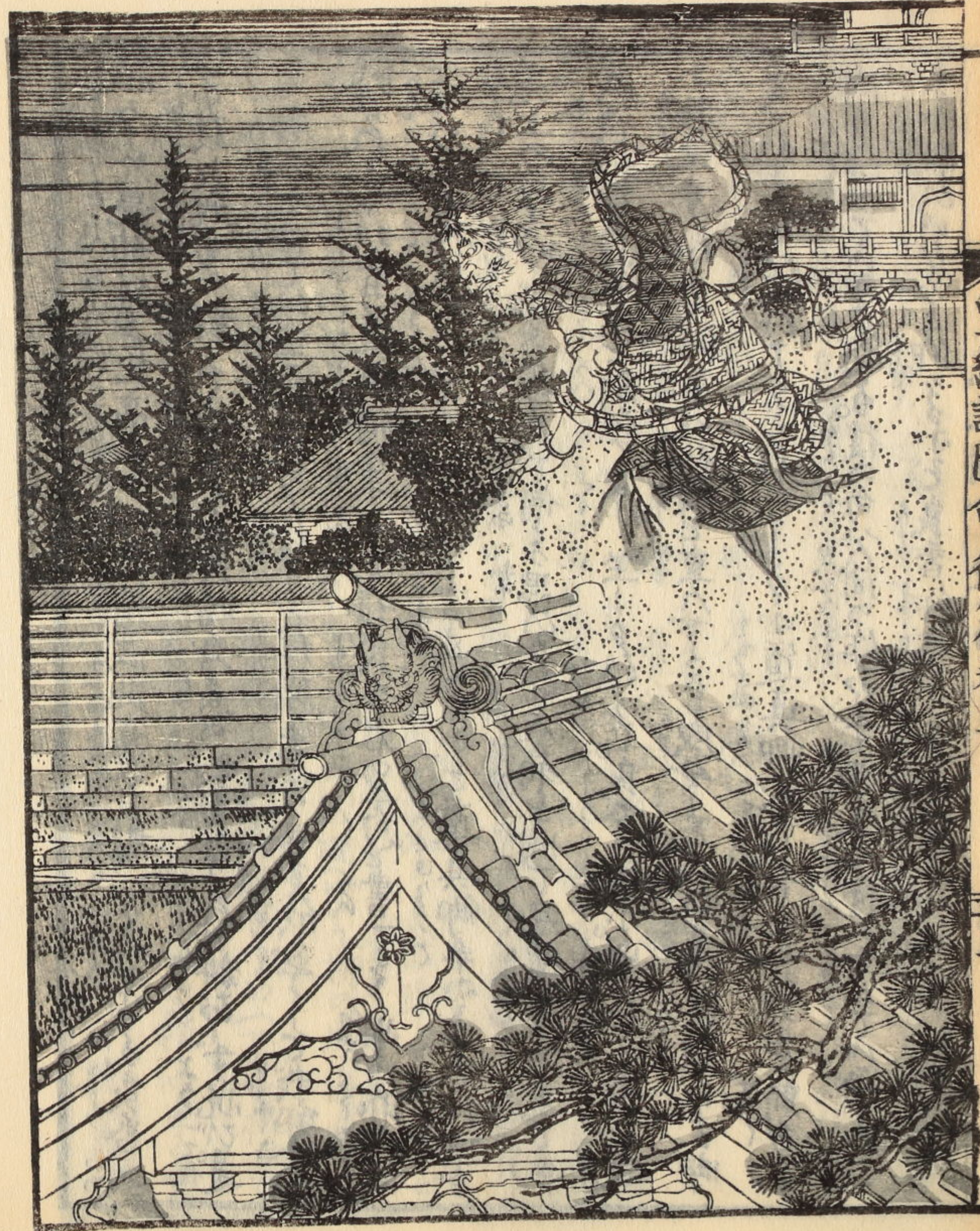
脚自作おていぢるれも後の句ハ人間の作おす必定鬼神の句おていぢるれハ一

羅生門らせいもん  
 鬼神きしん  
 都良香とらか  
 詩うたと嗣ついで



羅生門らせいもん  
 鬼神きしん  
 都良香とらか  
 詩うたと嗣ついで

三十五



羅生門らせいもん  
 鬼神きしん  
 都良香とらか  
 詩うたと嗣ついで

三十五

けりと敬号嘆し自作ありと言し更の今更耻く後悔して誠小卓見の程伯  
 入いかり。実ハ如是くおていと有し次第と語れれむ道真卿も微笑しむし  
 実さる更おていなり御作の絶妙さる小感し鬼神對句と叫ぶるがれど雨句も  
 御自作は並小いと返されし事と其後寛平二年の春續岐守小任せし任國小  
 赴たれし一國の政勢と裁判あり南條郡滝の宮の官府小任しむし暮春の比松  
 山小遊び風景を眺望し入奥のあまりの二百の待を賦し其詩小曰  
 低起沙鷗潮落曉 乱系野馬叶深春

然小其年の四月より七月のころまで雨降を早續け農民大困窮し之れを  
 道真卿是を憐れむの城の山の神小祈誓し祈雨の壇を築け是小登りて  
 丹城と凝し雨を祈めし小第三日雨より大雨降出さかぐ盆を傾るがごとく  
 三日三夜小おちく降徹し夕小と市人農民腹鼓を叩て躍り舞怡し更

限りなく一國の人民皆道真卿の盛徳と深く感し此殿永く此國小在りと祈り  
 因小曰續州滝の宮の里人き今以て七月二十五日例年滝の宮おて踏哥をたし  
 天満宮と祭りし俗是を滝の宮踊と稱すと云く

斯て道真卿は寛平三年任滿都還りし式部少輔小任せし左中弁を兼  
 りの程なく藏人頭小進し又曾て宇田天皇の勅命小依て類聚國史と云る  
 書と撰りし今年落成して献じし二百卷の大書にて本朝小いす斯程乃大  
 部の書籍有まなり是日本書紀より以下の曆史のまを集め部類を分ち人の考  
 見小便しれり小なりと云帝大不覺感在し其功勞と御賞美ありて更御褒  
 賞と賜りたり今年関白大政大臣基経公繼と云る悪瘡と患ひの清し小重り  
 終小患死去ありたる遇齡五十三才なり帝深く惜ませし以照宣公と謚を給りし  
 脚子息時平と云々儀小任しり四年菅原道真卿参儀小任せしれり

五年弟の皇子敦仁親王を春宮小立玉（こたたま）り。此時帝の睿慮（すいりょ）を以て時平の妹を  
 以て春宮敦仁親王の御息所（みよしよ）とす。道真卿の御女を以て二の宮齊世親王の  
 御息所（みよしよ）とす。久り。六年九月道真卿古歌三百首と撰出。新選万葉集と  
 題し。上下二巻なり。哥一首毎小御自作の詩を副（まが）り。詩數（うたかず）三百首也。  
 日六年八月遣唐使を（たうしや）らんとて菅原道真卿を大使とす。紀長谷雄（きながたけ）副使  
 と定めて入唐させんとす。其準備をなせしむる。其頃唐朝（たうてう）小叛臣有  
 て兵革起り唐の代大亂（たうらん）とす。由（よし）はえなれ。遣唐使の義を止（とど）めしむ。日七年小  
 左大臣源融（みなもとのゆき）公薨去有（あり）り。壽七十三才なり。然小帝ハ御生得御（みよなう）病小在（あり）せ。  
 朝政を聽せしむ。懶（なま）く思召一時道真卿を召（よ）れ。朕（みづか）身（み）病小朝政を聽（き）む  
 怠り（なま）がちなれ。万民の訴（う）松（まつ）滞りて恐（おそ）る。世の憂（うれ）愁（しゆ）となす。下（した）の（を）帝位（ていゐ）と  
 子小（こ）織（お）人（ひと）とす。六如何（いかに）と勅（しつ）回（わ）あり。多（おほ）道真卿色を正（ただ）し。是ハ勅（しつ）紹（しやう）小（こ）以（も）て

とも恐（おそ）か。君（きみ）の御老年とす。御幼年小（こ）とす。世玉（よたま）ハ御位  
 成（な）讓（じやう）せ玉（たま）人（ひと）更（また）並（なら）ぶ。す。君御（きみみよ）病小在（あり）す。朝政の義ハ臣等ともくも執  
 計（か）らひ（か）。今（いま）ま（ま）く世（よ）成（な）治（ち）せり。と練（れん）奏（そう）あり。多（おほ）小（こ）帝（てい）勅（しつ）許（もと）在（あり）て御讓  
 位の御沙汰（みよさた）ハ止（とど）めり。今年六月道真卿五十才あり。其御年賀を祝（いわ）し  
 進（ま）せん。と人達貴（たうたか）由（よし）賤（せん）也。吉祥院とい。寺（てら）小（こ）奉（ほう）會（かい）。詩哥の題を採りて慶賀  
 の意を述酒宴を催して延（えん）奉（ほう）と賀（が）し。多（おほ）小（こ）一人の老翁葉香（らうおう）を（を）行（ぎやう）纏（ぢん）り。多（おほ）小（こ）畏  
 の沙金と文（ぶん）と。未（いま）り。賀延の文臺の上置何とも言（い）で去（さ）る。小（こ）人（ひと）不（ふ）察（さつ）小  
 其の道真卿小（こ）と達（たつ）し。其文を披（ひ）れ。其文辞小（こ）菅家（くさけ）の（を）人（ひと）們  
 師の知命（ちぢめい）と賀（が）せし。多（おほ）小（こ）因（よ）て此沙金を贈るなり。金（かね）ハ思（おも）ふ心（こころ）の挂（か）り。ぬ（ぬ）表（ひょう）ハ沙金  
 壽の數限りか。人更を祈る多（おほ）小（こ）あり。維（い）所為とも不知（しらず）。後日小（こ）帝乃御  
 所為なる更相（あひあ）知（し）り。減（へ）小（こ）御見（み）負（ひ）の睿慮の程（ほど）と難（たが）有（あり）り。多（おほ）小（こ）時（とき）小（こ）春宮敦仁君ハ

皇紀訂正圖會後篇卷五

卅五

御幼稚の時より學問を好む。萬賢々々。御座る。時道真卿。今昔を  
下され。我周唐。去一日。小百首の詩を作。人曼彼。數人有。と。卿。幼の時より。能  
詩を作り。況。今。文學。小富。才。智。其。亦。出。者。有。彼。一日。小百首の詩を賦せ。八。物。久。七  
歩。小。奇。句。と。吐。し。支。亦。亦。登。り。依。て。一時の内。小。十首の詩を作。て。見。す。登。り。と。題  
戎。給。り。名。を。道真卿。少。も。詩。一。六。す。領。掌。あり。其。日。の。酉。の。刻。より。戌。の。刻。の。初。まで  
小。安。く。と。十首の詩を賦。して。献。り。ゆ。り。其。中。小。殊。小。秀。逸。と。安。ん。ん  
唯別殘鶯與落花  
今宵旅宿在詩家

送春不用動舟車

君使韶光知我意

右の詩。後。年。大納言。公。任。朗。詠。集。を。撰。一。時。加。ら。れ。り。其。次。の。年。道真卿。春  
宮の御所へ。奉。り。れ。り。敦。仁。親。皇。御。多。去。年。一。時。小。十首の詩。と。作。成。り。て。卿。の。宏。也  
を。知。り。足。り。と。い。ふ。試。小。今。二。時。の中。小。十首の詩。を。作。て。ん。や。と。望。り。ゆ。り。と。安。ん。ん

御更。小。い。と。て。更。小。辭。し。も。色。も。り。酉。の。二。刻。より。戌。の。二。刻。まで。只。二。時。の中。小。十題の  
詩。を。作。て。献。り。ゆ。り。親。王。も。臣。下。達。も。其。達。才。を。感。ず。前。代。未。だ。例。を。聞  
か。ず。後。世。亦。有。す。れ。ば。機。ゆ。ち。賞。美。せ。れ。と。右。の。詩。三。首。失。て。十。七。首。菅。家  
詩。集。小。い。え。り。曰。九。年。の。春。藤。原。時。平。と。大。納。言。公。任。左。大。將。と。兼。り。ゆ。り。菅  
原。道。真。卿。を。權。大。納。言。小。任。右。大。將。を。兼。り。斯。て。春。過。夏。も。な。り。多。小  
帝。度。御。不。例。ゆ。り。づ。る。多。小。又。道真卿。を。召。れ。春。宮。御。讓。位。あり。と。い。ふ。言。を  
勅。詔。ゆ。り。ゆ。り。道真卿。奉。り。ゆ。り。の。春。宮。已。小。十三。才。小。あ。せ。ゆ。り。殊。更。聰。明。睿  
智。の。聖。君。小。て。在。せ。御。讓。位。の。義。滅。小。可。茲。ゆ。と。勅。答。あり。多。小。帝。御。欣。悦。在  
曰。辛。七。月。十三。日。春。宮。敦。仁。親。王。小。御。元。服。せ。進。せ。て。万。乘。の。密。位。を。禪。り。ゆ。り。御  
身。小。御。飾。と。落。さ。せ。ゆ。り。て。朱雀。院。へ。入。せ。ゆ。り。多。小。亭。子。院。の。君。と。も。や  
又。實。平。法。皇。と。も。や。な。れ。り。吾。朝。小。法。皇。の。尊。号。有。此。帝。より。始。り。たり

醍醐天皇御即位

時平乱行奪叔父妻孫

春宮敦仁親王人皇二十代の帝祚小崩り此君を醍醐天皇とすも即ち先  
 帝平第一の皇子にて御母勸修寺内大臣高藤公の御女御子とす世承香殿  
 の女御とすもれり寛平五年春宮小立せり。日九年十三才にて登極し。元  
 年号と昌泰元年と改元ありて。先帝小上天皇の尊号と奉りし藤原時  
 平と菅原道真卿と兩卿相並んで朝政を執行せり。其義大臣小准せり  
 是當時大臣の官なれり。抑道真卿御年五十才天の生る英才とて和  
 漢の經史小涉むぬ限中なる博學多聞あり上忠直篤行の君子なり。又時  
 平八照宣公の嫡男小て其家系小於り双者あり貴族とれり。生年とす二十  
 七才也。好色放蕩あり。その子己を慢し能を妬む性もれり。道真卿と  
 天地雲壤の違かり時平乱行の第一と時時平我館日果阿利使後と

聚て酒宴と雜談せしる中。當時世小勝る美人とて維ありを問れ  
 る。平貞文とて入者各て當世の美人とす。君の御伯父大納言圓経卿の北堂  
 小勝る女姓なり。いと言ると時平耳小留其夜の酒宴果て皆退散しり。り  
 翌日叔父圓経の許へ使者を遣り細有る。夜貴館へ方違小参り由言せし  
 る。圓経小我甥か。當時權勢肩を並る人あり。時平の頼あり。二儀小  
 及ず。承引の旨返答して使者を返す。俄小山海の珍味を取寄せ。邸中掃淨  
 ありて。饗應の準備を細相待れり。小其夜時平意小通。葦と同伴して叔  
 父の館へ到り。れ。圓経大不尊敬して。客殿へ請ひ。傾て酒宴をす。り。善美  
 を尽して。饗應。官法を奏し。歌舞をたせ。與を添られる。皆酒宴の  
 半酣。小及び。頃圓経秘藏の琵琶を取り出して引出物とす。時平進せられり  
 小時平謝して。此賜も忝か。れ。今。今月の御饗應。小北堂の見参。小入まり



こといひと望まれぬを國経は何の氣も付ず。夫と最安れ御妻なりと北堂  
 疾呼出し時平を拜せし。和琴を弾せし元来國経八年稍聞て北  
 堂のよき看りしを平生小夫を厭意ありきと云。時平初て叔父の妻を  
 ばらむ小貞女が言しむ十倍増する佳ふ。窃窕なる顔挑李のど。婢  
 嬪も姿揚柳小似て。羅綺なる堪る風情艶小わてつらむのあす。春草の  
 ごとく細れ平小て挿鳴と和琴の音色妙か。小細声より新鶯の囀るが如く。人  
 を襟りと寒く。むる小ぞ色好の時平忽ち眼を奪られ魂を湯の頻  
 小目とて情を送り。あゝ心成らうされぬ。北堂も折し時平の方と云れり。こ  
 時平信心動れ左右ひて國経小多酒と勸め酩酊とせんと巧されぬ。國経も  
 時平の心術を知す。強らうと。數盃を傾け果は前後と忘るまで小酔す  
 れども時平と見ると叔父小向ひ今宵の卿食應は絨小す。遭はれ盛饌あり

庶幾は今宵の御引出物小北堂を我小賜らんやと傍若無人小所望せれる小國  
 経は大小酔まれ折れを只是當座の戲言あり心得何の思慮もあ。即所望と  
 あむ國経が命も進す。増て況賤妻小於也。具と還りてと云れ吉小答其  
 俸席上小酔伏れ。時平仕する。いと独笑。北堂を無体小引立席とまで云。國出  
 婦人を我車抱え乘其身も。小乘て我館へ還られ。誠小乱行も無道とも  
 論せん。多行余なり。國経は夜風の身小寒小酔醒て眼と覺。座辺をすれぬ  
 時平小下小還られと覺。小皿盃器の狼藉する斗成。近侍の女房小北堂の  
 義と問。多小女房各て。前小時平の君御臺所を引連て。まひ。何方。伴ひまふ  
 や。向きの侍。小叔父君の我小賜り。いと侍て歸るなりと曰ひて。御車小乗す。せ。御身  
 由とも小乗て歸り。まひと云。多。國経は小引立。我酔醒。と何更を言。更小  
 覺す。時平も酒。小乘。當座の戲れ。侍て歸られ。おも。急いで迎を遣はせ。と

使者と時平の館へまゐせ。先刻ハ光駕と曲られ奉り、但し御座真小患妻を召連  
 御歸有し。國経耽醉と御見送付し、失敬の罪と免され、賤妻と歸し給ひ、息と  
 中遣され、時平執奏の青侍を以て先刻ハ種々奔走し、預り、怡不堪、其砌北堂  
 を御引出物、小賜り、御辭退し、及む具とて還り、此上今更返し進せ、言  
 せ敢て返され、使者中の方かく歸て、主人小時平の及答の趣を告ぐる  
 小。國経、國果最愛の妻と奪れ、妻あねを身と煙と恨と憤られ、當時執政  
 の時平も、奈何も仕ぐ。無念あが、其終き置れ、時平ハ彼婦人を奪り  
 てより、昼夜側を放さず、電愛し、遂小子と儲られ、後小中納言敦忠と申、是  
 此北堂ハ在原某平の子息棟深の女と。是亦依て世人知由、不知、時平の不義、我  
 意を爪弾くと憎と、且とも其權勢、小怕と、維一人表向て、諫言する、人由無り、  
 斯て昌泰二年己未の二月、帝の睿慮、時平と左大臣小任、道の真卿を右大

臣小任、此時より道真公と世人菅丞相と稱し、丞相ハ大臣の唐名なるも、  
 又此時帝の外祖藤原高藤、仁明帝の皇子と源光二人も、いさ大納言、  
 菅公常小思召、時平ハ照宣公の子息と、大臣の家柄なれ、左大臣小任、  
 吏理の當と、我ハ儒官の卑なり、起りて家小例なれ、右大臣小登用せ、其位貴  
 族と高藤光等の令より、小吏俾りあり、先年渤海の使者裴頰、我を相、位  
 三公、昇るべし、久高、高、小居、身小災害及、言先見符節を合す、  
 尤國家の為、存身小禍の及、忠臣と者、厭を、小あ、貴族と乗、  
 其上、高天へ畏あり、表と奉りて、再三、官位を辞し、主上由、上皇由、敢  
 て、勅許なり、時平、若冠なれ、彼を佐て、朝政を正し、子、倫余、  
 己、更、得ず、其、小過、せ、斯て、時平と菅公、六月、交、小朝政を、  
 時平、毎度、依、估、員、裁、許、す、諸人、恐、排り、其、當番の、月、新、松、人、

菅公ハ裁判平しんノ由仁恕を旨めとして新しん於聽きノ我猶人の如ごとくある由ハ裁断少せう滞とまりあるとて諸人悦伏えつぷく。御當番の月ハ自みづかし新しん人少せう。衆人菅公明断めいだんと感かんず賞しょう美びする小こ付つて八時平はつじへいの不決断薄徳はくけつだんはくとくを排はらぬ者ものハナリタリ。左府さふの妻めかけりし此この雙ふたを以もつて菅公の名譽なごうを妬ねたむ君小きみこ終はつ奏そうして官位くわんゐと削落けつらくさんと思おもはれられたる由素もとり忠正ちゆうせいの菅公一点いんてんの御過失おんがし無なかれ。終はつ奏そうする種しゆゆなく。あれ妻めかけが出來いでよと思おもはれ多おほく彼源光かみげんみつハ菅公小こ位階ゐを越こえられれる之無な念ねん小こ思おもひ時平じへい小こ阿あ利り福ふくひく俱とも小こ菅公かみ於退おのれ謀まり加かえああず泉大將いづみだいしやう定さだ四し大納言だいなごん清貫せいくわん右中みぎなかつ兼かね希き世よ藤ふじ菅かみ根平ねへい貞文せいぶん紀蔭連きえんれんみみ日未ひみ左府さふ小こ阿あ利り速すみとと菅公かみ於妬ねたむ時とき時平じへいの館くわん小會令せうゐりやう專せん小こ菅公かみと追退おひくせた邪謀よまごころ於を商議しやうぎする

扶桑皇統記圖會後篇卷之五畢

